

第2回甲子園塾

日本高等学校野球連盟主催 甲子園塾 報告書

日時：平成21年12月18日（金）～20日（日）

会場：中沢佐伯記念野球会館・大阪府立箕面東高等学校

長野県阿南高等学校

野球部監督 村山雅俊

～目次～

はじめに	3
第2回甲子園塾の概要	4
都道府県連盟の役割	6
部活動の役割と課題	8
指導者としての基本的な考え方	9
部員とのコミュニケーションの図り方	14
新入部員の指導についての班別討議	16
ベースボールの誕生・日本の球史	18
保護者会,OB会との対応	21
体罰についての班別討議	22
不祥事件の取り扱いの防止	25
実技	27
グラウンド整備・用具の管理	27
キャッチボール	29
ペッパー	30
バント練習	30
内野ノック	31
外野ノック	31
バッティング練習	32
バッテリー育成	33
走塁のポイント	36
ノックの実践練習	37
参考資料	37
おわりに	44

～はじめに～

今回、日本高等学校野球連盟主催「第2回甲子園塾」を受講させていただき、非常に多くの刺激と示唆をいただきました。その内容を形に表すことで私自身の頭の整理はもちろんですが、この報告書をもとに多くの方とともに向上していけたら嬉しく思います。

拙い文章で読み取りにくい部分もあるかとは思いますが、また甲子園塾での内容をまとめた今回の報告書は私を通した形になりますので、講師の先生方の本意が伝わらない部分もあるかと思えます。その点ご容赦いただき、目を通していただければ幸いです。

日頃より膨大な仕事に追われる中、今回の甲子園塾を企画運営して下さった日本高等学校野球連盟のみなさま、溢れる情熱で受講生を指導して下さった尾藤公塾長始め、山下智茂先生、日下篤先生、高橋広先生、中野好光先生、坂本浩哉先生、西岡宏堂先生、田名部和裕先生、小森年展先生、甲子園塾で出会えた全国の指導者の方々、そして教員として働き始め2年目の若輩者である私のわがままを聞いてくださった長野県高等学校野球連盟のみなさまに心より感謝し、本報告書での挨拶とさせていただきます。

～第2回甲子園塾の概要～

1. 趣 旨
- ①高校野球のよき指導者となるために、高校野球の歴史、規則、指導者としての心構え、指導方法を研修する。
 - ②受講生同士の交流を深め、指導者としてのネットワーク作りの一助とする。
 - ③都道府県連盟、審判員とのより良い関係について研修する。
 - ④全国大会を視察し、指導者としての予備知識を体得する。

2. 講 師
- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 塾長 | 尾藤 公 | (技術・振興委員会委員長、元和歌山県箕島高校監督) |
| | 山下 智茂 | (技術・振興委員会委員、元石川県星稜高校監督) |
| | 日下 篤 | (技術・振興委員会委員、元兵庫県育英高校監督) |
| | 高橋 広 | (徳島県鳴門市立鳴門工業高校監督) |
| | 中野 好光 | (石川県高等学校野球連盟理事長) |
| | 坂本 浩哉 | (北海道高等学校野球連盟理事長) |
| | 西岡 宏堂 | (日本高等学校野球連盟審議委員長) |
| | 田名部和裕 | (日本高等学校野球連盟特命嘱託) |

3. 会 場
- 講義：中沢佐伯記念野球会館
実技：大阪府立箕面東高等学校

4. 受講者	北海道	藤田 朋軌	北海道滝川工業高等学校	監督
	岩手	千葉 勝英	岩手県水沢高等学校	監督
	山形	丸山 信輔	山形県高畠高等学校	監督
	福島	田中 巨人	福島県双葉高等学校	監督
	栃木	小針 崇宏	作新学院高等学校	監督
	埼玉	藁谷 公次	埼玉県大宮高等学校	監督
	千葉	増田 雄二	千葉県柏陵高等学校	監督
	東京	安藤 徳明	八王子高等学校	監督
	神奈川	碓 義行	神奈川県橋本高等学校	監督
	長野	村山 雅俊	長野県阿南高等学校	監督
	富山	黒田 学	富山第一高等学校	監督
	福井	見延 陽一	福井県鯖江高等学校	監督
	岐阜	金子 浩隆	岐阜県東濃実業高等学校	監督
	愛知	高井 耕志	愛知県福江高等学校	監督
	滋賀	北村 優	滋賀県愛知高等学校	監督
	奈良	豆越 秀人	大和高田市立高田商業高等学校	監督
	大阪	藤林 則孝	大阪府泉大津高等学校	監督
	兵庫	紙谷 猛	兵庫県三田祥雲館高等学校	監督
	岡山	奥山 和典	岡山県興陽高等学校	監督
	広島	荒谷 忠勝	広島県呉商業高等学校	監督
	山口	原田 真弥	山口県徳山商工高等学校	監督
	愛媛	菅 哲也	愛媛県丹原高等学校	監督
	高知	山本 泰道	高知県中村高等学校	監督
	佐賀	山田 和人	佐賀県鹿島高等学校	監督
	熊本	野仲 義高	東海大学付属第二高等学校	監督
	宮崎	河野 隼人	宮崎学園高等学校	監督
	沖縄	真玉橋長郎	沖縄県具志川商業高等学校	監督

～都道府県連盟の役割～

講師：北海道高野連 坂本浩哉理事長、石川県高野連 中野好光理事長

今回の受講者は全員が監督であるためか、都道府県連盟の役割についての質問に答えられない場面もあり、緊張感ある講義となった。

受講者へ

①該当都道府県高野連の歴史、会計等を調べてみてほしい。

⇒長野県高野連の歴史については不明。

会計については日本高野連平成 20 年度の収入が 828,522,507、支出が 923,134,94。

長野県高野連平成 21 年度中間決算の収入が 30,000,000 弱

長野県高野連加盟は硬式 94 校、3,338 名、軟式 10 校、195 名の加盟を得ている。

長野県高野連の加盟校平均人数は 35.5 人、全国平均は 41 人。

部活継続率が昭和 60 年 72.9%から平成 21 年 83.1%まで上昇している（日本高野連）。

⇒残りの 16.9%の生徒をどう支援していくか

②甲子園に出場するために連盟に加盟している。→加盟するからにはルールの順守が必要

⇒日本学生野球憲章（資料参照）や大会参加者資格規定（資料参照）、高校野球特別規則等の確認が再度必要。

③球場補助員等に対し、感謝の気持ちと積極的に協力する姿勢をお願いしたい。

⇒連盟役員を経験することで違った見方、考え方ができるのではないかな。

北海道高野連の取り組み

・指導者を審判に割り当てる⇒審判講習会を実施し、練習試合等は指導者が審判を行う

メリット：ルール指導が行いやすい

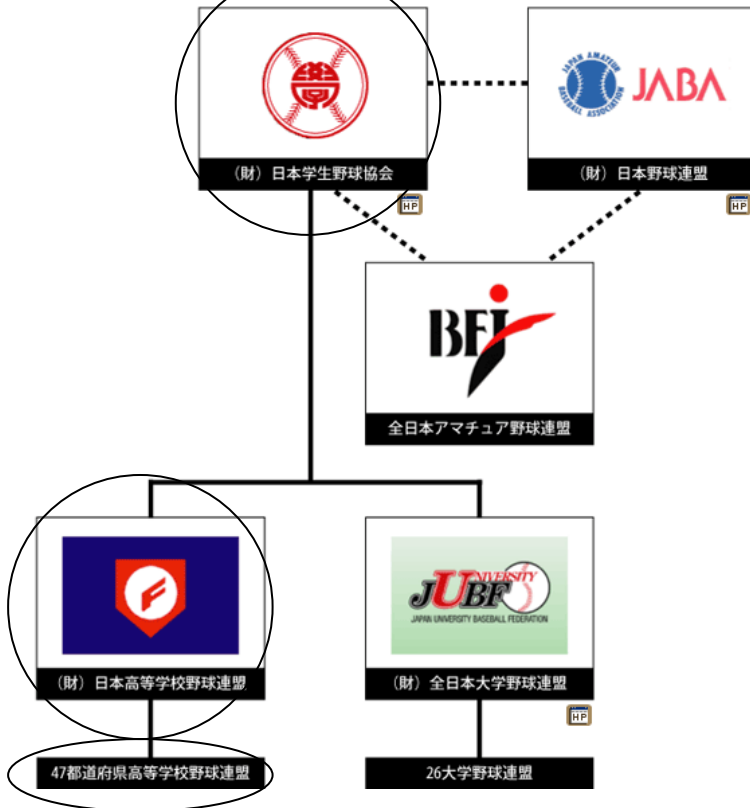
経費削減

デメリット：指導時間の減少

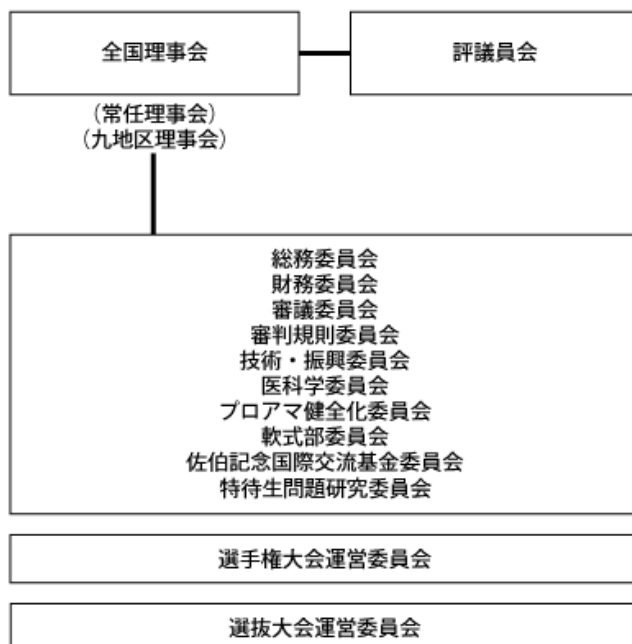
・NPO 法人との連携

NPO 法人北海道野球協議会と連携し、野球フェスティバル（小中高の連携）や野球教室、球場調整、審判研修会等を行なっている。NPO 法人北海道野球協議会は平成 12 年 6 月に設立され、現在加盟団体は 16 団体に至っている。

<アマチュア野球 組織図>



<日本高等学校野球連盟 組織図>



～部活動の役割と課題～

講師：石川県高野連 中野好光理事長

野球部での活動を意義あるものとしていくための講義であり、全体の中から野球部を、そして部活動を捉えた内容が印象的であった。みなさんはもうご存じのことと思われかもしれませんが、確認の意味を込めてご一読いただけたらと思います。

1. 野球部は他の部や同僚から見ると異質性を感じる。

⇒連盟が異なっている点や施設・予算面、全校応援等が特徴的

⇒学校内で信頼されることが必要になる

⇒指導者はまず授業と校務分掌をしっかりと行うこと。

生徒が学校生活を大切にするような指導を行なっていく。

2. 高校野球から教えられたこと

「グラウンドは夢と現実を結ぶ空間」

「何かをつかむと高校生は劇的に変わる。だからこそ準備が大切」

3. リーダーシップとフォロワーシップ

①リーダーシップの定義

「集団の目的達成のために各メンバーが連帯感を持ちながら、自分の能力をフルに発揮できるように**援助する能力**」 国分康孝

②リーダーの仕事

- | | |
|------------------|-----------------|
| a 父性的な仕事 | ・・・集団の目標の徹底 |
| b サイエンティストとしての仕事 | ・・・役割再現状況の観察 |
| c 母性的な仕事 | ・・・興味に配慮するケアの部分 |

ぐいぐい引っ張るリーダーに多い状況として、

- ・リーダーに従属 ・・・依存している関係
- ・リーダーに反抗 ・・・思い通りにならないことで反発している状況
- ・リーダーに閉塞感 ・・・何を言っても聞いてくれないという諦め

メンバーがやる気に満ち喜びを体験できるならフォロワーの成長が期待できる。

⇒**母性的な仕事**が大切になる

③フォロワーシップの定義

「リーダーの指導力を引き出し、リーダーのかじ取りを支える力である。そして、卓越したリーダーシップの陰で必ず存在する現場の力である。また、自らが所属する組織やそれを支えているリーダーに対し、誠実な貢献と建設的な批判を使い分けながら歩む、主役たちの偉大な力」吉田典生

米国の研究によるとリーダーの影響力は良い悪いに関係なく 20%である。残りの 80%はフォロワーが握っている。

⇒どんなフォロワーを育成できるかが鍵となる。

4. 部活動の役割

①教育の一環としての高校野球

- ・座学では学べないものを学ばせる

②高校野球と生徒指導

- ・追い込みすぎると生徒に歪みが出てくる
 - ⇒他職員と連携とる必要性（HR 担任や教科担当等）
 - しかし相互に頼っている状況は危ない
 - ⇒自らやる姿勢は常に持つておく
 - 小さなことでも情報を報告・確認・共有していることが大切

目に見えているということは問題が表出している状況

⇒小さな変化でも即対応

③大会参加者と共同の主催者

- ・野球部以外の生徒とも時間を見つけて面談を行う
 - ⇒認められ感が生まれる
 - ⇒野球部にとっての良いフォロワーになる
- ※これがうまくいかないと野球部の生徒に不満出てくる
 - ⇒「野球だけやっていたらいいや」という悪循環に陥る可能性

5. その他

- ・顧問不在時の安全管理・指示徹底が図れているか
 - 「裁判で負けるのは現場」弁護士談
- ・管理職への報告をまめにする
 - いいときも悪いときも含め、困っていることも報告する

～指導者としての基本的な考え方～

講師：徳島県鳴門市立鳴門工業高校野球部監督 高橋広先生

まず始めに高橋先生が「僕は甲子園に出るために20年かかりました。そこからまた校歌を聞くまでに3年かかりました。甲子園で校歌を聞くのに23年かかったんです。僕はなぜ甲子園に出られたのかはわかりません。けれども、皆さんには逆説的にこれをやったら甲子園出るのに20年かかるよという意味合いで聞いてほしい。」とおっしゃいました。高橋先生だから20年で出場できるようになったのかもしれないし、他の人が同じことを同じようにやっても違った結果になるでしょう。しかし、それでも外してはいけない大切なことがお話の中でいくつも出てきました。それらを吟味し実践していくことは、甲子園出場はわかりませんが、少なくともチームの成長につながると思います。その内容を私なりにまとめましたので、ご一読いただけたらと思います。

- ・徳島県内に池田高校蔦監督がいたのに一度も教えを乞うてない。OP戦もしていない。
⇒駆け出しの25歳が雲の上の存在をライバル視していた
⇒もっと動けばよかった
- ・長崎県清峰高校吉田監督は平成15年突然TELをかけてきた。夏負けた後すぐの電話。
⇒3日後に一緒に練習し、紅白戦を行なった。
⇒清峰高校はその後、よく練習するようになり、練習に文句も言わなくなった。
⇒清峰高校は平成17年夏甲子園出場を果たし、平成18年春選抜で準優勝を果たす。
- ・生徒を勝っているチームに触れさせる。

この人は！！という先生のもとを訪ねる心があるか、勇気があるか

- ・徳島は5回勝てば甲子園。しかしその中で監督が活躍するのは1試合あるかないか。
⇒若いころは自分で動きたがる。しかし、やるのは選手たち。

決戦までに生徒たちに力（体力・技術・精神力等）をつけておく。そして

生徒たちの力を信じ、戦っていく。

- ・野球の基礎はキャッチボール。その前に人間形成。

- ・野球部への入部が先ではなく、高等学校への入学が先⇒高校生としての生活を大切に

指導を受ける生徒をどこまで高めていけるか。

他者の意見を聞き入れる心（謙虚さ）や自らの課題を受け入れられる心（強さ）を育成できるか。

- ・甲子園に出ることで教育効果が変わる。
- ・甲子園に出て甲子園で必要なことがわかった。
⇒よく言われることだが、まずテンポが早い。これが一番。
- ・目標設定は甲子園での戦い方を基準にする。

甲子園に出ることでしかわからないことがある。

例えわかったとしても生徒たちが本気で感じているかどうか。

⇒一流に触れることで見える部分、足りない部分がわかってくる？

- ・準優勝で満足するかどうか。
よく頑張ったな、十分だなと思う時点でダメ！！甘えや妥協につながる。
- ・1点にこだわれるか
コールドをなくす、次につなげていくため

歩み続けること。歩みを止めないこと。

日を空けてグラウンドに行ったとき、生徒に対して「立派だな」と思えた。
それから、上手くいくようになった。

～指導者としての基本的な考え方～

講師：兵庫県育英高等学校野球部元監督 日下篤先生

高橋先生とは異なる視点から基本的な考え方のお話をいただきました。高校野球の意義、そして野球部の成長につながる道筋をどうつけるかといった視点でのお話で、高校野球は勝負の世界ということを強く意識させていただきました。生徒たちの成長や生徒たちが考えるだろう高校野球の持つ意味すら指導者が握っているという緊張感を今後の指導に生かしていきたいと思います。内容が多岐にわたっているため、まとまらない文章となっておりますが、ご確認いただけたらと思います。

・高校野球の意義

平等はない。力があれば勝てるし、力がなければ負ける。なぜなら競争の世界だから。

⇒挫折を味わうこと

負けること

失敗すること

これらが今、子供たちに不足している。

⇒高校野球で経験させてほしい。

しかし、この経験がプラスとなるかマイナスとなるかは**指導者次第**。

・野球が強くなっていった要因の一つに「勉強」がある。

⇒野球終わったあとの進路を意識し始めた

勉強を頑張ることに対して周囲が評価するようになる

⇒立場、環境が人を変えていく

《練習場面》

・精神野球と技術野球の相補性

⇒精神野球と技術野球の絶妙なバランスが大切？

過度な精神野球に陥る要因に生徒を指導する技術の不足がある。

生徒を指導する効果的な技術的ノウハウを2、3人に与えることで

自然と耳を傾け、成長していく。そしてチームに変化が起きる。

⇒講習会・研修会に積極的に出向き、先輩指導者に教を乞い、

技術指導のスキルを上げていく

実績（甲子園、技術指導）が教育効果を変えていく。

⇒受け手（生徒）の変容を導く要因を技術指導から作り出す

- ・一流の技術指導者は「どうでもいい欠点と重大な欠点」の**見分け**ができる。

⇒重大な欠点・・・これを直せばすべてが変わる欠点

次に、重大な欠点をどう伝えていくかということが課題となる

例) 意識させるか、させないかということ？

- ・何かあればすぐに頼りになる人に聞きに行った。⇒謙虚な姿勢が不可欠

《試合場面》

- ・生徒の良い部分を徹底してやらせる。⇒自然と生徒はそうなる。

例) 本塁打を期待される生徒に対して、

「4回中1回の外野フライでいい。あとは3回三振でいいから」と伝える。

⇒**指導者自身の軸**をぶらさない必要がある

- ・自チーム見えるようになったら相手チームも見えるようになる

- ・三振、エラーは怒らない。仕方がないから。

しかし、サインミスやカウント間違い、みんなのルールを守らない等に関しては怒る。

⇒許せる部分と許せない部分の線引きが必要になってくる。

- ・監督の表情を生徒たちは見ている。

⇒迷ってサイン出すと上手くいかない。迷っている表情も生徒は見ている。

⇒緊張や心理状態が生徒に伝わっていく。

⇒監督がどこまで**試合展開に対して深み**を持っているかが余裕を生む要因になる？

- ・ゲームになったら、あとは身を任せる。

⇒鳴門工業高校高橋先生と同様

⇒この心境になれるまで練習の段階から突き詰めているか

- ・強豪といわれるチームはセオリー通りに試合を進めることが多い。

⇒強豪校の監督といえど、周囲からの声が怖い。

⇒付け入る隙があると考えられる。

- ・故障しない選手はいいところで抜いている

～部員とのコミュニケーションの図り方～

ここでは受講者の現場での話から講師の先生方からお話をいただく形で進んでいった。それぞれの先生方のお話はもとより、受講者の方々の苦悩と工夫が垣間見え自身を振り返る良いきっかけとなった。大切なことは生徒の目線や立場に立つことで、指導者側の理屈や理論を前面に出しすぎないことかなと感じた。その微妙なさじ加減が難しいのだが・・・。

以下に、出てきた内容をまとめましたので、ご覧ください。

《受講者より》

- ・年齢が近いことでコミュニケーションは取りやすい。しかし、距離感が近づきすぎないように気をつけている。
- ・監督の顔を窺う生徒の姿を見たときに考えが変わった。
- ・部長、コーチから監督に代わって上手くコミュニケーションが取れなかった。
- ・時間空いたときに個人面談を行い、生徒と向き合う時間を作っている。

《講師より》

高橋先生

- ・コーチは監督とは異なり、兄貴分であり相談役。
- ・たまに言葉をかけることで効果があることもある。
- ・今はスタッフが充実しているのでチームとしての機能を考え、役割に振っている。
- ・大切なことは指導者が生徒の目線まで落とせるか
⇒役者になりきれるか（5者の一つ）※5者・・・学者、医者、易者、役者、芸者

日下先生

- ・部長と役割を明確に分けた。
⇒現場は監督がやり、成績は部長が面倒を見る。

山下先生

- ・1日5回生徒に声をかけるようにしている。
- ・指導者が目線を下げることによってコミュニケーションが生まれる。
- ・教員は世間知らずという意識のもと、さまざまな業種の方に会いに行き、勉強会に参加。
- ・玄関に鏡を置いておき表情を作ってから出勤し、いい表情ができるようになるまで待ち、帰宅している。
- ・顔を研究してから人の表情がわかるようになってきた。
- ・例えば選手が辞めていくのは指導者自身に魅力がないから。

尾藤先生

- ・尾藤スマイル

⇒子供たちを許せるようになったとき、笑うようになった。

契機となったのは、2回目の甲子園出場の1回戦サードのエラー

《練習日誌について》

高橋先生

- ・練習日誌はやっていた。しかし平仮名ばかりで読みにくかったのでやめた。

そのかわり、自分で毎日日記をつけている。

山下先生

- ・練習日誌はやっている。3分間スピーチもやっている。

文章を書くことや人前で話す＝苦手なことで人は成長していく

⇒苦手なことと向き合う強さ、少しだけ遠くに飛ぶ訓練

⇒野球のここぞ！！という場面で生きてくる。

尾藤先生

- ・3分間スピーチをやっていた。

(テーマ決めたり、決めなかったり、雨の日は必ずやっていた)

～新入部員の指導についての班別討議～

ここでは新入部員への当たり方について各受講者から意見が出され、それを班ごとに討議し発表する形で進んでいった。新入部員に関して特別な当たり方をしていない私にとっては、各受講者が工夫をこらし指導されているのを聞くこと自体が新鮮でした。今後の当たり方を考え直すきっかけとなりました。

諸先輩方はすでに実践されていることばかりだとは思いますが、ご一読ください。

《受講生より》

- ・3学年合わせて10数人の人数なので特別に新入部員を指導することはない。
- ・1学年約20人いるので、3月25日以降に指導係を2名（エースと学生コーチ）選出し、指導にあたらせている。その際、他の上級生から指導が及ばないようにしている（5月中旬まで）
- ・日替わりで上級生が1年生を指導している。
- ・好きな野球をやめさせることはしないと事前に約束。
- ・かっこいい先輩を見せることで新入生はやめないと考えている。⇒上級生への指導
- ・学校全体の雰囲気づくりに気をつけている。
- ・入部前に「なぜ高校野球をやるのか」を問う。
- ・夏までは2,3年生の取り組みについてきてもらう。⇒その姿から高校野球でやるべきことを感じてほしいので、上級生への指導を徹底して行う。

《班ごとの発表》

- A班 ・1年生の仲間づくり ⇒ 硬式と軟式、保護者同士
- ・上級生への指導 ⇒ 褒める、背中を見せる、意識づけ
 - ・指導者の取り組み ⇒ まめな声かけ、保護者への細かい説明、事前の家庭調査
- B班 ・高校野球のあり方を問う
- ・高校野球に求められることの確認
 - ・学校から求められることの確認
- C班 ・入部前に明確な説明
- ・基礎基本の練習 ⇒ 常にボールに触らせる

《課題》

- ・高野連と中体連、硬式クラブとの関係づくり

《講師より》

高橋先生

- ・指導係は3年生（希望制）
- ・1年生は1学期中の練習時間19時まで（レギュラーメンバーは別）

日下先生

- ・「人を育てられるような人間を育てておく」
- ・入部前に野球部の厳しさをよく確認しておく

山下先生

- ・一流を見せるようにしている
例）富士山や日本一の練習をしている高校等
- ・1年生には礼儀、2年生には努力、3年生には感謝を教える
- ・硬式と軟式の子で和がとれないので注意している

尾藤先生

- ・率先垂範の雰囲気作り
- ・尊敬できる先輩を探しなさいと新入生にアドバイス
- ・中学までの関係性をリセットし、箕島の生徒として生活するよう指導

- ⇒新入生対策
- ・入部前に高校野球の確認
 - ・野球の楽しさに触れさせる
 - ・学校生活を優先する（年度当初）
- 保護者対策
- ・入部前に高校野球の確認
 - ・保護者会への積極的な参加のお願い
 - ・保護者同士の関係づくりに注意
- 上級生対策
- ・新入生入部前に誇れる上級生となるよう指導
 - ・新入生入部後は遠すぎず近すぎずの距離感に注意

～ベースボールの誕生・日本の球史～

講師：日本高等学校野球連盟 田名部和裕氏

ここでは、米国でのベースボール誕生にかかるエピソードや日本での野球の発展に関する話題などその内容は興味深いものであった。高校時代のコーチが「まずは赴任した高校の歴史を調べなさい」と言っていたのを思い出した。同じように、私自身野球について知らないことが多く勉強不足を日々痛感していたが、今回をきっかけに今一度野球について勉強しなおすことが必要であると感じた。

ノンフィクションライターで「黒人野球のヒーローたち」や「野球とクジラ」、「ベースボールと日本野球」の著者である佐山和夫氏とのやりとりから学んだ点も多いとおっしゃっていたことから、佐山和夫氏の著書に当たっていくことも貴重なアプローチであると感じた。

《ベースボール誕生当時の精神》

- ・ **民主主義**を基にしたルール（移民の人々の心の声）
- ・ ヒットを打っても本塁に戻らなければ得点にならない⇒各塁は途中寄港の発想？
※当時は捕鯨が盛んであり、1845年原型を考案したアレキザンダー・カートライトの父は捕鯨をしていた。
- ・ ファウルラインは「もっと近くで見たい」という要望から生まれた⇒見るスポーツへ
※タウンボールはどこへ打ってもよかった
- ・ 外野は自由な設定
※民主主義によりみんなが納得したらOK
- ・ 当時から**フェアプレイ**が重要⇒フェアプレイはタウンボール後のパーティーで表彰
- ・ 審判員は1人で、**観客が陪審員**⇒審判がジャッジを大きく行う一つの要因

《野球の七不思議》

- ・ 守備側のチームがボールを支配している ⇒ 他のスポーツにはなかなかないルール
- ・ タイムゲームではない ⇒ 最後の一球を投じる必要性
- ・ 投手のマウンド ⇒ 雨対策
- ・ ホームベースの形 ⇒ カーブピッチャーの存在
- ・ 帽子の着用 ⇒ ユニフォームの原型は軍服
- ・ まず1塁へ走る理由 ⇒ 当時は下投げで3塁に強い打球多かった
- ・ ストッキングのデザイン ⇒ 敗血症対策

《ベースボール初期のルール変遷》

- 1845年 空振り 3 回で打者アウト
- 1858年 3 つ目を見逃した場合もカウントすることに
Good ball strike you out!!
- 1863年 ボールのカウント始まる
- 1876年 9 ボールで 1 塁へ
(80 年には 8 ボール、81 年には 7 ボール、84 年には 6 ボール、86 年には 7 ボール)
- 1884年 投球は上手投げとなる
- 1887年 5 ボールとなり、この年だけ 4 ストライク
- 1889年 3 ストライクと 4 ボールで四球が定着
- 1893年 投手板とホームプレートの距離が 18.44m となる
- 1900年 ホームベースが五角形となる (フレデリック・シュミットの影響)

《人物紹介》

- ・アレキザンダー・カートライト (1820～1892)
捕鯨一家の出身で、銀行勤務のあと事務用品の店を手掛ける。
マンハッタン地域の防火のため消防団を結成し、ニッカーボッカーズも結成。
ベースボールの原型を作った。
- ・ヘンリー・チャドウィック (1824～1908)
ベースボールの草創期に 50 年間にわたって新聞記者として勤めた。
プレイを数量化、表示するボックススコアを考案。
1858 年創設のルール委員会委員長に就任。
「ベースボールを米国の国技にするなら、絶対に賭博をやめなさい」とキャンペーン。

《日本での野球の誕生》

- ・フォーレス・ウィルソン (1843～1927)
明治 4 (1871) 年 8 月 21 日 明治政府のお雇い教師として来日。
第一大学区第一番中学 (現東京大学の前身) で主に数学と英語を教えた。
明治 5 (1872) 年 学生たちの生活を憂慮し戸外の運動を奨励しベースボールを指導。
※来日以前に南北戦争において北軍でベースボールを教わっている。
- ・フレデリック・ウィリアム・ストレンジ
明治 8 (1875) 年 20 歳の時、東京英語学校 (大学予備門の前身) の教師として来日。
明治 16 (1883) 年 学校スポーツの必要性を説き、日本で初めて陸上運動会を開催。
フェアプレイを提唱した。

《フレデリック・ウィリアム・ストレンジの教え（佐山和夫氏の解説）》

- 1) 定刻を厳守せよ。
- 2) 奮闘努力せよ。負けても、負け惜しみを言うな。
- 3) 競技は公正明大にやれ。卑怯なことをするな。
- 4) 審判に服従せよ。人は神に非ず。ときに判定に謝ることもあるが、異議を唱えず、冷静を保て。
- 5) プレーを楽しめ。自分より優れた相手を敵視するのではなく、師とせよ。
- 6) 賞品は記念品のみとせよ。
- 7) 儉約はスポーツマンの第一の信条。他人に憐みを乞うてまでして贅沢をするものではない。
- 8) 練習は学業の暇にせよ。そして練習場に立ったときには、さっさと練習をして、終わったら速やかに去れ。長く残っても気迫が弛緩するだけだ。克己、節制、制欲、忍耐、勇敢、沈着、敏活にして機知縦横、明快にして気宇壮大、これらの気質特性こそ、天がスポーツマンに与える最高の賞品ではないか。

《野球の名付け親》

・中馬 庚（1870～1932）

明治3（1870）年 鹿児島市西千石町で生まれる

明治15（1882）年 西郷隆盛設立の三州義塾に入学

明治21（1888）年 第一高等中学校（一高の前身）に入学
名二墨手として活躍

明治26（1893）年 東京帝国大学入学

明治27（1894）年 校友会雑誌 例言で「野球」訳を発表

明治29（1896）年 一高が横浜外国人クラブを破ったときの引率者

明治30（1897）年 我が国初の野球専門書「野球」を著す
同大学史学化を卒業

※その後、全国各地で教員として勤める。

昭和45（1970）年 野球殿堂入り

《正岡子規（1867～1902）の功績》

・多数の日本語訳を考案

例) 打者、走者、直球、飛球、死球、短遮（遊撃手）等

・多数の野球に関する俳句や短歌を残している

例) 草茂み ベースボールの 道白し

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れども飽かぬかも
うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に

～保護者会、OB会との対応～

講師：日本高等学校野球連盟 小森年展氏

ここでは私自身が日々難しさを感じている保護者会との対応を中心にお話をいただいた。すべての保護者の年齢が私より上であり、息子のようにかわいがってくれる保護者がいる一方で、なかなか連携がとれない保護者もいる。各家庭での教育方針の違いや高校野球に期待することもそれぞれ異なっており、野球部としての軸をきちんと定めることに加えて、それらの理解と協力へとどうつなげていくかが課題となってくる。

まだまだ保護者との対応において方向が見えていない状況ではあるが、内容を整理することによって方向性を少しでも探れればと考えている。

《保護者の変化》

- ・少子化により子供への親の関心度が高まっている
⇒子供からの情報だけを聞く保護者もいる
- ・スタンドでの応援の様子も変化（コーヒーや飲み物を配っている姿もある）
⇒連盟で指導することもある

《保護者同士の関係》

- ・軟式出身の親：中学での関係性薄い
硬式出身の親：中学での関係性高い ⇒ 高校での関係づくりに影響

《組織との付き合い方》

- ・会計 ⇒ 明朗にするためのルール作り（集金法、会計、報告を明確に）
臨時徴収の会計報告
- ・距離感 ⇒ 教員としての付き合い方と指導者としての付き合い方を分ける

※種々の問題が起こる要因

- ・背番号もらう前後
- ・不明朗な会計

～体罰についての班別討議～

ここでは、体罰に関する討議を3班に分かれて行なった。その後全体会として発表を行い、講師の先生方よりアドバイスをいただいた。体罰は今回の甲子園塾でも特に重要な講座のように感じた。根本は絶対に良くないという立場に立ち、なぜ体罰が起こるのか、体罰を経て何が変わるのかといった内容から、自分自身体罰をしてしまいましたといったデリケートな部分にまで話が及びました。

そこで考えたことは、体罰を受けた本人はもちろん、その家族や友人まで巻き込み大きな傷を残すということ。そして指導者自身を守るためにも、その指導者から指導を受けるであろう多くの将来ある生徒にも迷惑をかけてしまうということである。

体罰は絶対に良くない。ではどうしたらその考えから脱却できるのか。それを探っていきたい。

《同じ班の受講生より》

- ・体罰はいけない。しかし指導者になりたての頃はあった。暴力に代わる手段なかった。最近生徒に合わせてアプローチの方法を変化させられるようになってきた。言葉の暴力はあるかもしれない。
- ・体罰をしています。しかし、体罰がいいとは思わない。体罰をしやすい環境にある。保護者会でも事前に説明をしている。保護者からも指導に関して意見をいただくことある。最近の保護者は過保護すぎる。
- ・暴言に関して以前に投書あり。手を出すことで辞める理由になってしまう。
- ・“やる気にさせる”の対極にあるもの。感情的になってやることはない。相手によって使い分けている。最近体罰についてよく考える。
- ・体罰をしてしまったことについて後悔した。練習や試合ではないが、生活面で乱れている部分にはやってしまう。

- やったほうは覚えていないが、やられたほうは覚えているもの。
相手の感情次第では、ぼんと背中を叩いただけで暴力ととられることもある。
生徒がうまく乗ってこない場合は、粘り強く生徒と話をしている。
- 生活態度に関して体罰はある。
譲らない部分は徹底的に譲らない姿勢を示す必要がある。
2年4カ月という期間を考えると、即効性とインパクトが必要。
- ガンガンやっていいと言われてもいざというときには誰もフォローしてくれない。
理不尽なことへの免疫をつけてほしいという思いはある。
- 体罰に関する世論の高まりが体罰の質を変化させている側面を感じる。
求めることと実際のギャップに怒りの感情が湧いてきたとき危険だと考えている。
生徒に対して許す部分を増やしていくことで怒りの感情を生まなくなるのでは？
指導に関する引き出しを増やしていくことと生徒との信頼関係が体罰脱却の鍵となる。

《班ごとの発表》

A 班

- 大半が経験者であった。先生はできるが生徒はできないというギャップがある。
- 生活態度に関することや見せしめ、なめられたくないという感情や2年4カ月という期間の制約といった理由から手をあげてしまう。
- 生徒の感情に大きく左右されることから日頃からの信頼関係づくりが重要。
- 体罰に頼らないために、指導の引き出しを増やすことや許せること、本を読むことで指導者としての人間性を高めていくことがある。
- 高校野球を終えるときには、やってよかったなあと思ってほしい。

B 班

- 自分自身が保護者となったときに今の自分は子供を預けたい指導者か？
- 体罰に頼らないために、ミーティングやレポート、野球ノート、追い込む練習を使う。

C 班

- 指導者自身の経験から体罰を肯定しがちである。
- 指導力を上げていく他ない。

《講師より》

日下先生

- ・野球選手にとって一番つらいことはグラウンドに入れないこと。
許せない部分があるときはグラウンドに入れさせなかった。

山下先生

- ・指導者が変わらなければ、生徒は変わらない。
⇒指導者自身が勉強していく
- ・「見つける 活かす 育てる」 ⇒ 自信を持たせる
- ・「最良の教師は、生徒である」

尾藤先生

- ・拳では叩くまいと決めていた。だから平手で叩いていた。
- ・息子と一緒に甲子園を目指したが叶わなかった。その時一番初めに息子に手を出した。
- ・暴力はいけないという指導をするなら、指導者自身が背中で見せろ。

西岡先生

- ・一番多いのは、第三者からの報告によって発覚すること。
- ・生徒同士の暴力を処分したことで指導者の暴力も蒸し返されることがある。
⇒体罰と認識する人がいたら、それは体罰である。

～不祥事件の取り扱いの防止～

講師：日本高等学校野球連盟 西岡宏堂審議委員長

ここでは不祥事件の現状から対策までお話をいただいた。見えているようで見えていなかったということは大なり小なりあると思いますが、それが越えてはならない一線を越えたとき違った意味を持ってきます。対策としては、「部員とのコミュニケーション」に尽きると思います。何を感じ、何を考え、どうしたいのか。そういった一つ一つの理解が大きな意味を持ってくるのだらうと再認識しました。

生徒に寄り添うことにまだまだ違和感を覚えている上手くない部分が多いが、生徒に寄り添いながらも指導者としての目線や基準は崩さずにコミュニケーションがとれるよう日々勉強の毎日である。

《不祥事件の取り扱い》

・学校 → 都道府県高等学校野球連盟 → 日本高等学校野球連盟事務局（審議委員会→常任理事会） → 日本学生野球協会（審査室）

※月1回の審議委員会を週1回にしようと計画中

・処分内容：厳重注意、警告、対外試合禁止・謹慎、除名

※連帯責任弱まる傾向

《不祥事件の防止・撲滅》

・部員とのコミュニケーション

野球部入部の動機

ノックは監督と選手との最高の会話の場

キャッチボールは選手同士の最高の会話の場

・部長と監督のホウレンソウ

相互の報告・連絡・相談の重視

⇒部長と監督が父と母になり、野球を通じて生徒を育てていく。

教育の「教」の字にはムチ、「育」の字には鳥の巣という意味がある。

・仲間づくり

喜びを共有するように、悩みや苦しみも共有できる仲間作りができればいじめはなくなる。

真の連帯を育てよう！！

⇒どれだけ生徒たちが困難を乗り越えられるか、また指導者がどう支援できるか

《日本学生野球憲章改正の動き》

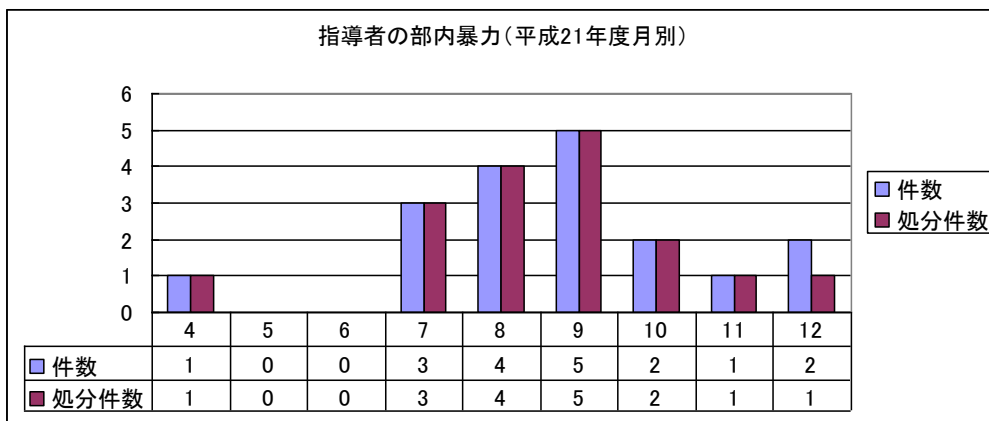
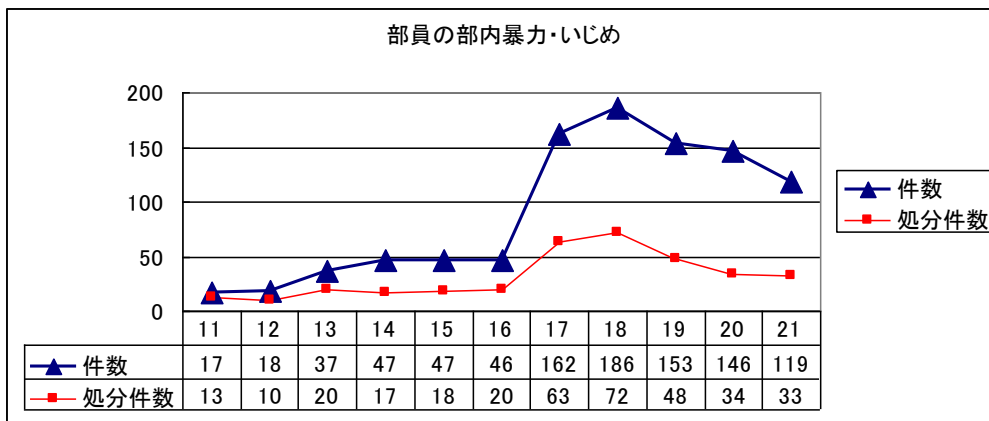
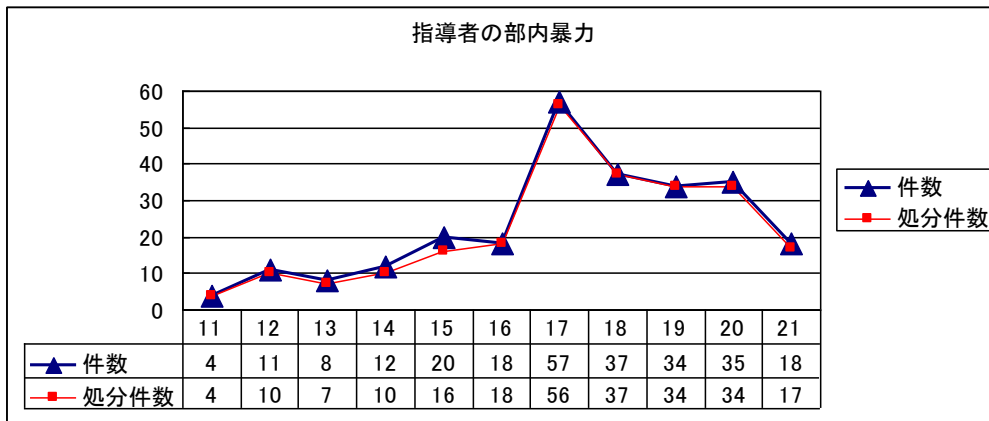
- ・週一日の休日を設ける方向で進んでいる

⇒部員の心身の健康のため

指導者のリフレッシュのため

指導者はこれを機会とし、日頃やらない仕事を進んで行なう（他職員とも連携）

《不祥事件発生件数の推移》



～実技～

2日目の朝、ユニフォームを着たときに高揚感を感じた。これから始まる実技の内容に胸を膨らませていたのである。甲子園で活躍された講師の先生方の話はどれも興味深く、野球を見る新たな視点を与えていただきました。

大阪府立箕面東高校の生徒が徐々に山下先生の雰囲気や熱気に同調していく様子を間近で見させていただいたこと、日下先生の生徒の動きを見る目や技術指導における生徒への当たり方、高橋先生の野球を奥深くまで考え実践されている様子は非常に刺激的でした。

実技指導ということで生徒個々によって指導方法が変わってくると思いますが、実際に講師の先生方の指導の様子をできる限り再現していこうと考えています。

《グラウンド整備・用具の管理》

山下先生

- ・OP 戦行ったときにはまず初めに①グラウンド②部室③トイレを見る。
⇒整備中に学校も見て回る。
- ・「礼に始まり、礼に終わる」これをどのような心で挨拶を実践しているか。
⇒誓いの心、祈りの心、感謝の心の3つを込めて挨拶をするよう指導している。
- ・グラウンドを見れば、そのチームの力がわかる。
⇒どこまで気が回せるか、隙がないかということ？
またそこまで気が回せる状況にあるかどうかということでもある？
- ・グラウンドは精神力を磨いてくれる。
⇒精神力を高めてくれる。
一生懸命やることでグラウンドが教えてくれる。
- ・「グラウンドとマナーを日本一にしよう」と言ってきた。
- ・グラウンドはきれいではなくてはいけない。 ⇒ 隙をつくらないということ。
- ・朝5時に起床し6時にはグラウンドに出て2時間かけて草むしり、整備をしている。
- ・練習前のグラウンド整備では、メニューを考えながらグラウンドをお願いをしている。

- ・水のまき方が1年生と3年生で違う。
⇒甲子園のグラウンド整備係「少しの水でもグラウンドが変わってしまう」
- ・伊集院静氏との食事の席で「グラウンドには人生がある。野球に神様がいる。白いボールに神様がいる」と言っていた。
- ・部室を整理整頓できるチームは強い。逆にできないチームは問題を起こす。
- ・投手なら衣服を畳んで置くような子は伸びてくる。
- ・指導者が整理整頓を徹底できるかどうかが大切となってくる。
- ・米国大リーグは道具の手入れ係がいる。しかし日本人は自分で手入れをする。
- ・道具を大切にする選手は伸びる。大切にしない選手は伸びない。
⇒グラブを磨いてこなかったら、素手でノックを受けさせた。
スパイクを磨いてこなかったら、裸足で練習させた。
⇒徹底してやっていると変わってくる。
- ・物が豊かになりすぎて物への愛着が弱くなってきた。
⇒物を大切にするような指導、そして人を大切にするような指導を。

日下先生

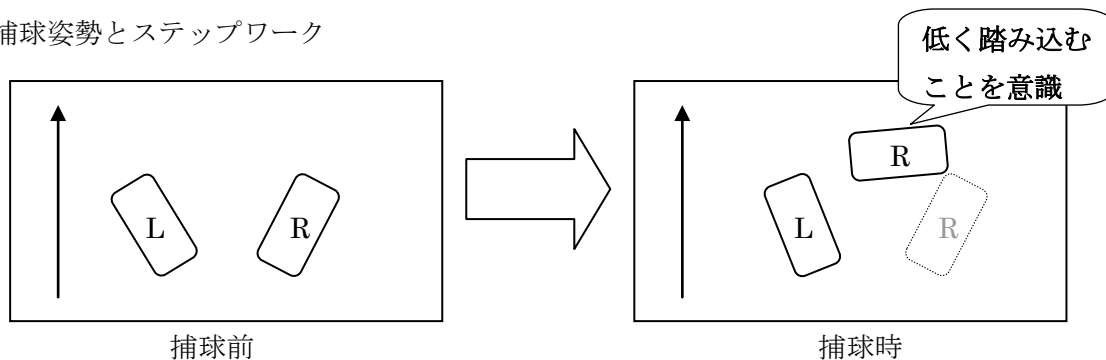
- ・トンボをかけるにしても、グラウンドを愛してくれ。一生懸命やってくれ。と指導。
⇒神様が味方をしてくれる。
- ・ひたむきに取り組めば必ず自分に返ってくる。
- ・清原和博選手は試合前にノックを受けた後、自分で守ったところを整備していた。
- ・上手い人のグラブやスパイクを見て学んでほしい。

田名部氏

- ・「グラブ」とは、愛なくしてはつづれない
⇒GLOVE

《キャッチボール》

- ・キャッチボールは肩慣らしではない。
- ・心のキャッチボールをやってほしい。「キャッチボールに人生がある」
 - ⇒思いやり : 相手の胸に投げること (尊敬される)
 - マナー : 謝れること
 - ルール : 逸らしたボールを取りに行くこと
 - 尊重 : ボールが胸にきた時に「ナイスボール」の声
 - 油断しない : 当たったら痛い
- ・いい選手は**相手のミス**を**ミスに見せない選手** ⇒ 動いている
思いやりがある
- ・キャッチボールでチームを作ろう。
- ・ポイントとしては、①正確に②速く③強く ⇒ 野球うまくなる、強くなる。
- ・捕球姿勢とステップワーク



※捕球時右手をそばに置き、握り替えて耳の横まで持ってくる。

- ・グラブ操作のプラスアルファ
 - 捕球前にグラブを閉じる ⇒ **捕球前に「間」ができる** (福留孝介選手)
 - グラブを持って走る練習 ⇒ グラブを持って走る習慣作り
 - ・ボール回しで甲子園に行けるかどうかが決まる。
 - ⇒甲子園に出るには 18~20 周/分、甲子園で勝つには 21~23 周/分
 - ※昨年資料によると、甲子園出場 14 周、甲子園勝利 16 周、全国制覇 18 周
 - ⇒相手が捕りやすいところへ投げているか (軸足と踏み出し足のステップワーク)
 - 受け手が**送球しやすい位置**に入れているか (体の左側にボールを入れるという準備)
 - 握りかえスピードとトップ作りは十分か (グラブ操作と右手の協調性)
- ⇒逆回しによって右足の踏み込みを強調する。
⇒そのとき体が流れないように腰を切って下へ投げらることを注意する。

《ペッパー》

・攻撃の基本であり、ゆるいボールを打つからこそ大切にする。

・技術ポイント

⇒グリップをボールに向けていく

ボールの7mm下に入れる

タイミングの始動はピッチャーがグラブと手を離したら

基本はワンバウンドで返す（最低ノーバウンド）

中心線を崩さずに打つ

・声をかけながら行う。

⇒野球は声を出して行うもの

声を出す余裕がある ⇒ 動きを体が覚えている状態？

・常に美しくあれ！！

※1対1のペッパーはリズム感が出る

《バント》

・技術ポイント

膝でとらえる

バットヘッド立ててあとは膝で落とす

バットは絶対に引かないこと

金属バットのバントは狙った所に転がすことが大切！！

（優秀なピッチャーで無死R1・2時のバントはピッチャー前へのバントが有効）

卵をつかむようにやさしく右手でキャッチすることで感覚をつかむ

近距離からの下手投げ ⇒ あごが上がらない

右手と左手の位置関係を変えない

3塁側へは右手の親指を投手側にひねっていく

《内野ノック》

・山下先生のノックへの思い

ノックバットを変える（内野用は短く、外野用は少し長め）

ノックが上手になりたいという気持ちを持ち続けている（今もジムに通っている）

バットは左手で持ち、右手でトスを上げる

右目でボール、左目で野手を見る

トスの位置は45度 ⇒ 一定して上げられるかがノック上達の道

試合行う状況によってノックを変える

（第1試合：緩い打球、第3試合：グラウンド状況の確認、強風：フライ多め）

打撃は選手の責任、守備は監督の責任 ⇒ やれば上手くなる

・ノックのバリエーション

イメージノック：野手がボールを持った状態から、ノッカーの体の向きで判断

禅のノック：無言でのノック ⇒ 声の大切さに気づかせる

ケンカノック：連続ノックで捕球したらすぐに打つ ⇒ 達成感を全員で味わう

他の部員は囲んで励ます

チームを盛り上げる意識

終了後ノッカーと握手

・ケンカノックの有効性の検討

・チームの状況を観察できる

・達成感を全員で感じられる

・周囲の仲間に背中を押される感覚、押す感覚を体験できる

・限界に挑戦することができる

・自信を持たせることができる

課題

・ノッカーの技術が不可欠

・身体疲労と精神疲労によりケガの危険性あり

・信頼関係がないと、ただの“しごき”になる可能性

・時期の選別が必要

《外野ノック》

・後方飛球の近距離ノック

・ダッシュ小フライキャッチ

・背走しそこへスロー

・スライディングキャッチ

《バッティング練習》

トスバッティング

・技術ポイント

インパクトにすべての力を出す ⇒ 押し手の人差し指で押し込む
バットヘッドは頭の後ろに入れない ⇒ バットが出てこなくなるから
引っ張ることからまず始める ⇒ スイングスピードを出すため
引っ張りの早打ちで腕の引き出し方とスピードを求めていく
内角を引っ張るときは左腕で持ってくる
膝の使い方が不十分な者にはスタンス広げてノーステップで打たせる

・注意点

条件反射的トスは× ⇒ トスの形を作ってからトスを上げる
できるだけ投手側から上げるようにする

・160km/hを再現する

トスを上げるスピードを次第に上げていき、160km/hのスピードをイメージする
スピード感に人間は慣れていく

・トスバッティングの応用

ダブルトス : 体の軸を意識する
イスに座ってのトス : しっかり上体で振り切る
手の間隔空けて振る : 左手の固定力を出す
バスター : ヒッティングポイントの意識づけ

《バッテリー育成》

キャッチャー

- ・ オブストラクションの意識

- ・ 防具は常につけておく

⇒防具を自然なものとして扱う

マスクは常につけておく（怪我防止）

- ・ 原則、タグプレイは両手

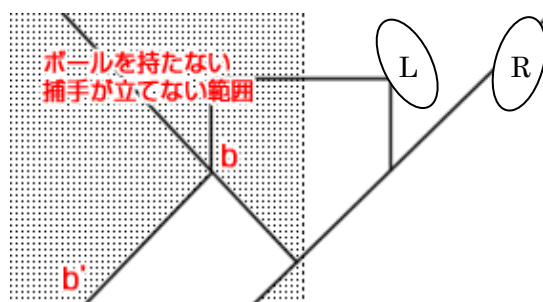
⇒右手でボール、それをミットに入れる

- ・ 技術ポイント

常にミットをピッチャーに見せておく ⇒ 手の根元で持っていくイメージ

右投手と左投手で体の向きを変化させる

難球処理は片手で行う



- ・ 考え方

配球はキャッチャーに任せる

9回裏2死満塁カウント2-3で何を選択するか ⇒ 判断材料

配球パターンや癖を常に注意しておく

余計な1球を要求しない

・練習法



この動きの連続 30 回を 1 セット



ライン上を蹲踞の姿勢で進行方向の足を中心に 180 度後ろピポットターン 3 本



蹲踞の姿勢からライン上で足を後ろにステップしていく (逆も行う) 3 往復



蹲踞の姿勢から右足の踏み出しと左足ステップをリズムカルに行う 3 本

⇒これを 3 周

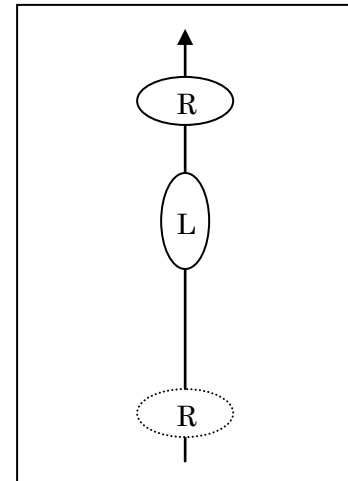
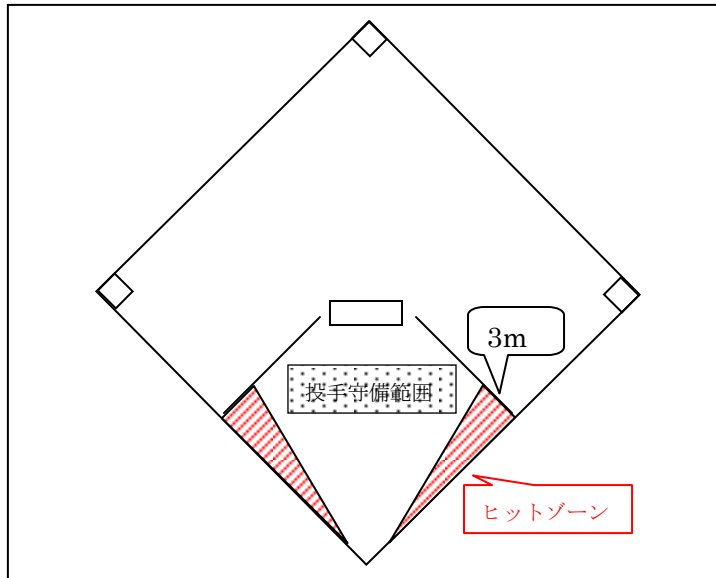
ピッチャー

- ・ウィニングショットはホームベース上でワンバウンドさせる（変化球）
- ・PF とピッチングをつなげる

右投手：3 塁側へ降り一度乗せてから 1 塁へ送球

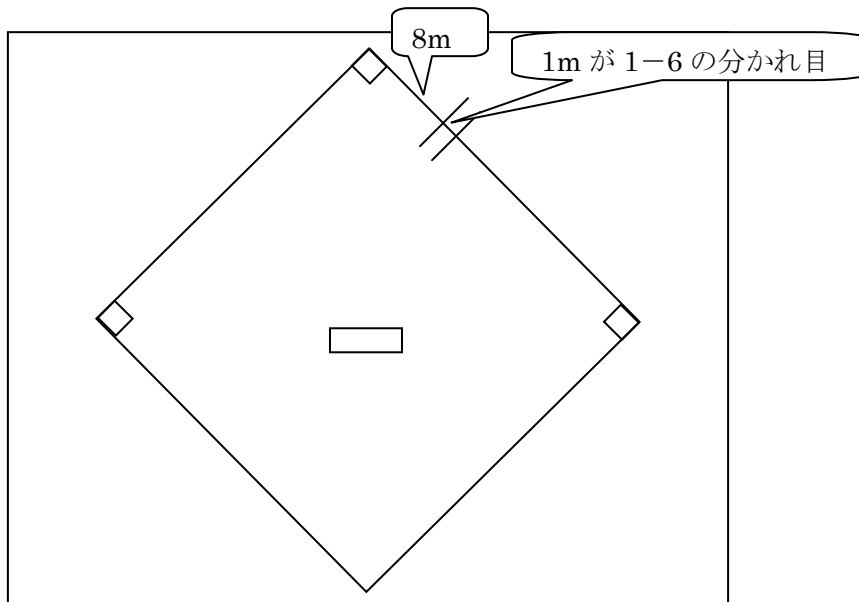
左投手：1 塁側へ降り一度乗せてから 3 塁へ送球

※キャッチャーの指示で変化球を投げると何かつかむかも・・・



右投手の場合

- ・1-6 での勝負の分かれ目

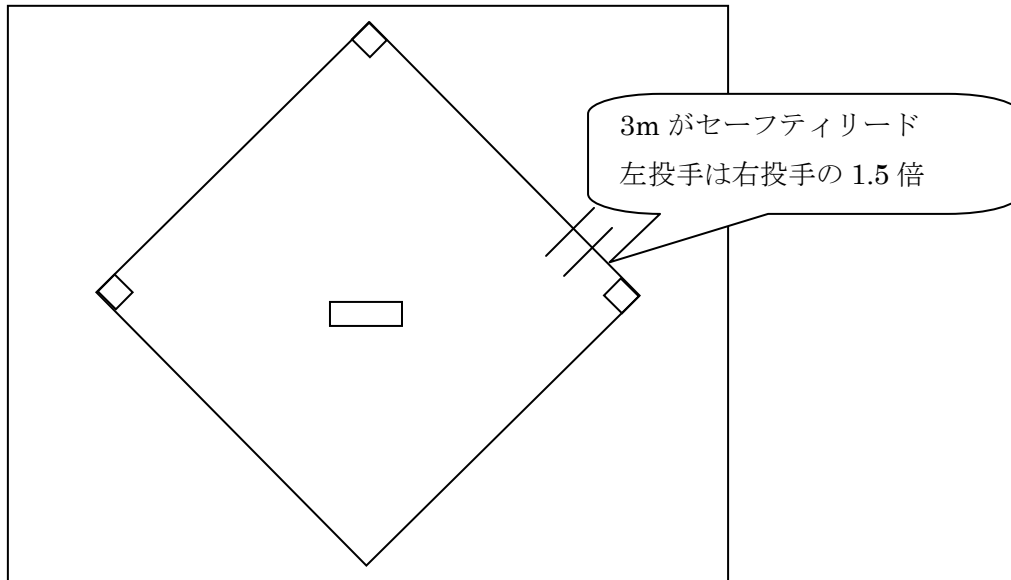


- ・腕の振り鈍い子には近距離からのクイックピッチングが有効
- ・癖に気をつける

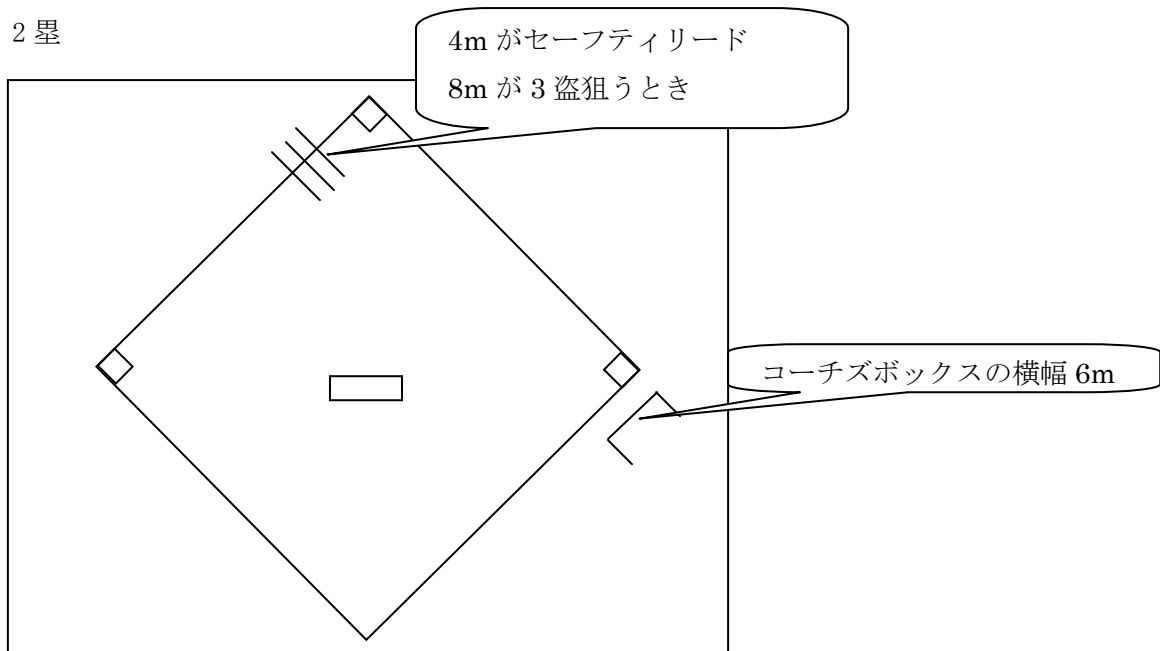
例) 右手のボール、グラブの位置、姿勢、時間、足幅、windアップ

《走塁のポイント》

1 塁



2 塁



・大切なこと

- ①事前の情報収集 (外野や各ベース etc)
- ②一瞬の判断と決断 (ベースコーチに頼りすぎない)
- ③サインの読み

《ノックの実践練習》

ここでは実際に大阪府立箕面東高校の生徒を相手にノックを打ちました。山下先生のノックを見た後ということもあり、各受講生が工夫を凝らし生徒とノックを作り上げようという雰囲気が非常に伝わってきました。

各受講生に与えられた時間は短かったのですが、事前に生徒を集めイメージするノックを伝え生徒とともにノックを始めていました。ケンカノックを始める者からアメリカンノックをする者、いきなり「休憩！！」と言う者さまざまで・・・。

具体的なノックの打ち方や指導はなかったのですが、生徒のことを考えどれだけの思いを持って、どれだけノックを打てるかがノック上達の道なのかなと感じました。

～参考資料～

第1回甲子園塾まとめ, 竹峰慎二, 2009

第2回甲子園塾要項

第2回甲子園塾「都道府県連盟の役割」, 坂本浩哉・中野好光

第2回甲子園塾「球史から学ぶ」, 田名部和裕

第2回甲子園塾「部活動の役割と課題」, 中野好光

第2回甲子園塾「不祥事件の取り扱いと防止について」, 西岡宏堂

長野県高等学校野球連盟ホームページ

日本学生野球憲章

日本高等学校野球連盟ホームページ

平成21年度大会参加者規定

平成21年度第4回理事会・評議員会（監督合同）資料冊子 長野県高野連南信支部

ベースボールと日本野球 打ち勝つ思考、守り抜く精神, 佐山和夫, 1998, 中公新書

資料（平成 20 年度石川県大会選手宣誓）

人としてどう生きるべきか。

汗・泥・涙にまみれ、一生懸命努力し、

希望を持って頑張り抜くこと。

それを私たちは、グラウンドの上で学びました。

これまで支えてくれた皆さんの励まし、

夢を追わせてくれた両親への感謝、

すべてが今、私たちのみなぎる力となっています。

今年で 90 回目を迎える高校野球の歴史、

そこに何があるのかを確かめるため、

また、新たな歴史を刻むため、

一球一球に想いをこめて

夢の舞台に挑むことをここに誓います。

平成 20 年 7 月 11 日

選手代表 石川県立鹿西高等学校 野球部主将 安藤光平

資料（日本学生野球憲章）

日本学生野球憲章

われらの野球は日本の学生野球として学生たることの自覚を基礎とし、**学生たることを忘れてはわれらの野球は成り立ち得ない**。勤勉と規律とはつねにわれらと共にあり、怠惰と放縦とに対しては不断に警戒されなければならない。元来野球はスポーツとしてそれ自身意味と価値とを持つであろう。しかし学生野球としてはそれに止まらず試合を通じて**フェアの精神**を体得する事、幸運にも驕らず非運にも屈せぬ**明朗強靱な情意**を涵養する事、いかなる艱難をも凌ぎうる**強健な身体**を鍛練する事、これこそ実に**われらの野球を導く理念**でなければならない。この理念を想望してわれらここに憲章を定める。

第一章 総則

第一条 この憲章は、学生野球の健全な発達を図ることを目的とする。

第二条 この憲章を誠実に執行するために、日本学生野球協会を設ける。日本学生野球協会の組織及び権限は別に規約でこれを定める。

第三章 高等学校野球

第十五条 高等学校の野球は財団法人日本高等学校野球連盟が、日本学生野球協会の指導の下に、それぞれの都道府県の高等学校野球連盟を通じて、これを監督する。

第十六条 それぞれの都道府県の高等学校野球連盟に加入することができる学校は学校教育法第四章に定めるものに限る。

第十七条 高等学校チームの参加することができる試合は、次に掲げるところにより開催せられるものに限る。

一 全国大会は財団法人日本高等学校野球連盟の主催したもの。

二 地方大会（近接せる二以上の都道府県）は関係都道府県高等学校野球連盟の主催したもの。

三 都道府県大会は都道府県の高等学校野球連盟の主催したもの。

四 都道府県を異にする二校の試合はそれぞれの関係都道府県高等学校野球連盟の承認を得たもの。

五 同一都道府県内の二校間の試合はそれぞれの学校長の責任の下に行なわれるもの。

第十八条 高等学校の野球試合に入場料を徴収する場合には、次に掲げる事項を厳守しなければならない。

一 全国大会にあつては、日本学生野球協会の承認を得ること。

二 地方大会にあつては、財団法人日本高等学校野球連盟の承認を得ること。

三 一都道府県内の試合にあつては、都道府県高等学校野球連盟の承認を得ること。

四 大会又は試合の終了後入場料徴収の承認をした協会又は連盟にすみやかに収支決算を提出すること。

五 入場料の使用は、大会又は試合するに必要な経費及び参加学校における体育の普及と発達に必要な経費の充当に限定されるべきこと。

第十九条 第四条第一項・第七条但し書及び第九条から第十四条までの規定は、高等学校野球にこれを準用する。

附則

第二十条 日本学生野球協会は、部長、監督、コーチ、選手又は部員に**学生野球の本義**に違背し、又は違背するおそれのある行為があると認めるときは、審査室の議を経て、その部長、監督、コーチ、選手又は部員に対しては、警告、謹慎又は出場禁止の処置をし、その者の所属する野球部に対しては、警告、謹慎、出場禁止又は除名の処置をすることができる。部長、監督、コーチ、選手又は部員にこの憲章の条規に反する行為があると認められるときも、同様である。

(2) その部長、監督、コーチ、選手又は部員について前項前段の規定を準用する。但し、この非行が、**学生野球の健全な発達を阻害し、又は阻害するおそれ**があると認められるときは、その者の所属する野球部についても前項前段の規定を準用する。

(3) 部長、監督、コーチ、選手又は部員の野球に関しない個人としての非行であっても、その非行が、**学生野球の健全な発達を阻害し、又は阻害するおそれ**があると認められるときは、その者の所属する野球部について第一項前段の規定を準用する。

(4) 学校法人の役員、若しくは、教職員、其他学校関係者の行為が、**学生野球の健全な発達を阻害し、又は阻害するおそれ**があると認められるときは、その者の関係し、又は関係せんとする野球部について、第一項前段の規定を準用する。

第二十一条 学生又は生徒で組織される応援団及びその団員は、常にその本分に基いて行動しなければならない。この応援団及びその団員の行動については、すべて、この応援団の所属する学校及び野球部がその責任を負うものとする。但し、この応援団、又はその団員が、その本分に反する行動をしたときに、これに関係がある野球部又は部長、監督、コーチ、選手若しくは部員について前条第一項前段の規定を準用する。

(2) 前項の規定は、学生若しくは生徒以外の者で組織される応援団、又はその団員が、**学生野球の健全な発達を阻害し、又は阻害するおそれ**があると認められる行動をした場合についてもこれを準用するものとする。

第二十二条 選手若しくは部員又はその代理人は、その選手又は部員と職業野球団その他のものと入団、雇傭その他の契約の締結に関する交渉その他の行為をするについては、財団法人全日本大学野球連盟

又は財団法人日本高等学校野球連盟の定めるところに従わなければならない。

第二十三条 この憲章の適用に関して、疑義を生じたときは、日本学生野球協会審査室の議を経て、会長がこれを決定する。

第二十四条 この憲章は、日本学生野球協会評議員会の議決によらなければ、これを改正することができない。

(2) この議決には、総評議員の三分の二以上の賛成を必要とする。

第二十五条 この憲章は昭和二十五年一月二十二日より施行する。

昭和 21 年 12 月 21 日学生野球基準要項として制定

昭和 25 年 1 月 22 日学生野球憲章と改正

昭和 38 年 2 月 11 日改正

昭和 40 年 2 月 6 日改正

昭和 46 年 2 月 13 日改正

昭和 53 年 2 月 22 日改正

昭和 54 年 7 月 12 日改正

平成 4 年 2 月 14 日改正

資料（平成 21 年度大会参加者規定）

平成21年度大会参加者資格規定

第 1 条 本規定は、全国高等学校野球選手権大会、全国高等学校軟式野球選手権大会（いずれも地方大会を含む）、選抜高等学校野球大会、その他日本高等学校野球連盟（以下本連盟という）主催による大会参加者、及び国民体育大会参加者に適用する。

(2) 本規定は、都道府県高等学校野球連盟主催による各種大会および試合参加者にも適用する。

第 2 条 **参加学校の資格**は、本連盟所属の都道府県高等学校野球連盟に加盟した学校に限る。

第 3 条 参加チームは、その**学校の代表**であることを要する。

ただし、同一学校であっても、遠隔地または交通不便などの理由で、本校と同一チームとして行動できない分校は、本連盟の承認を得ればそれぞれ単独で参加することができる。

承認された分校は、当該都道府県高等学校野球連盟に単独加盟することを要する。

第 4 条 参加チームの責任教師はその学校に在籍している校長、教頭、または教諭（常勤講師を含む）で、校長が適任者として委嘱したものに限る。また、監督は校長が適任者として委嘱したものに限る。

ただし、監督には他の加盟校の教職員を委嘱することはできない。なお当該者が所属する学校が、都道府県高等学校野球連盟に加盟していない場合はこの限りではない。

第 5 条 参加選手の資格は、以下の各項に適合するものとする。

(1) その学校に在学する男子生徒で、当該都道府県高等学校野球連盟に登録されている部員のうち、**学校長が身体、学業及び人物について選手として適当と認めたもの**。

(2) 平成 21 年 4 月 2 日現在で満 18 才（平成 3 年＝1991 年 4 月 2 日以降の出生者）以下のもの。

ただし、本条(7)項で参加資格を認められたものは満 19 歳（平成 2 年＝1990 年 4 月 2 日以降の出生者）以下でもよい。

(3) 転入学生は、転入学した日より満 1 年を経過したもの。ただし満 1 年を経なくても、学区制の変更、学校の統廃合または一家転住などにより、止むを得ず転入学したと認められるもので、本連盟の承認を得たものはこの限りではない。

なお転入学生であっても、前在籍校で野球部員として当該都道府県高等学校野球連盟に部員登録されていなかったものは、転入学した日から参加資格が認められる。

(4) 平成 21 年 4 月、高等学校第 1 学年に入学したもの。

ただし選抜高等学校野球大会には、この第 1 学年に入学したものは参加資格がない。

(5) 参加選手は、高等学校在籍 3 年以下のもの。

〔注〕

この在籍 3 年とは、あらゆる高等学校または高等学校に準ずる学校に計 3 年間在学するという意味である。例えば、第 1 学年に入学し、1 年生のとき中途退学して翌年改めて第 1 学年に入学しなおした時は、在

籍 2 年目と見なす。

従って、その生徒は第 1 学年、第 2 学年と 2 年間しか選手となる資格はないので、順調に進学しても第 3 学年には資格を失う。この場合、第 2 学年の秋季大会ならびに翌年の選抜高等学校野球大会まで参加資格があるが、通常参加できる大会数を越えて参加できない。(すべての在籍期間中で、春季大会と全国高等学校野球選手権大会は 3 回まで、秋季大会と選抜高等学校野球大会は 2 回まで)

- (6) 同一学校(分校を含む)の定時制の生徒も、全日制のチームに加わることができる。
- (7) 中学校卒業後、1 カ年以上高等学校に入学しなかったものは、当該都道府県高等学校野球連盟の承認を得れば参加資格がある。ただし当該都道府県高等学校野球連盟は、直ちにその旨を、本連盟に報告しなければならない。

第 6 条 同一学校の生徒でも、軟式野球部または硬式野球部に登録されている選手、部員は、同一年度内(3 月 21 日から翌年 3 月 20 日まで)は、転部しても選手としての資格はない。

ただし第 2 学期の新チーム編成上、止むを得ない理由がある場合は、本連盟の承認を得れば選手資格がある。

～おわりに～

3日間の日程を終え、さまざまなことを考えました。2日目の夜には講師の先生方も交えた懇親会を開いていただきました。全国から情熱あふれる受講生が集まっていました。輝かしい実績を残している先生方でも失敗を経験してきていることを知りました。受講生も日々の指導に悩みながら信じた道を突き進んでいる姿がありました。そして野球の話をするのはやはり楽しいと感じました。

「甲子園出場に相応しいチームとして甲子園に出場する」

甲子園塾の価値がここにあると思いました。あるべき姿を求め日々研鑽を積んでいく。必要とされるのは、生徒への深い愛情と野球への深い愛情だろうと考えました。生徒への深い愛情を持って日々コミュニケーションをとり理解を深め、生徒の心身の発達を願うときには母のようにやさしく、ときには父のように厳しく接していく。生徒の成長を何よりも喜び、互いに高め合えるような集団へと変化させていく。そして野球への愛情を持って野球の歴史を始め、特性から戦術、ルールに至るまで隙間なく網羅すること。野球の持つ人々を動かす力や難しさを十分に認識した上で、野球で人々を幸せにしていくこと。

今後、数多くの困難にぶつかると思います。挫けそうになることもあるでしょう。しかし、そんなときには甲子園塾を、生徒への愛情と野球への愛情を思い出したいと思います。

閉校式や雑談の中で講師の先生方がおっしゃっていたことをここに記します。

「グラウンドでは百姓のつもりで、作物を育てるつもりでやりなさい」

「人生とは出会いです。いい人、いい本、いい旅に出会ってください」

「キャプテンとマネージャーを大切にいなさい」

「正しい野球用語、正しいルールを高校生に教えてください」

「ケガをして休ませる際にメニューも指示できる医師を探しなさい」

「困ったら高野連に相談してください」

「指導者も選手と同じように身体のケアをいなさい」

「家庭も大事にいなさい」

最後に、多くの方に心から感謝をし、そこに何があるのかを確かめるため夢の舞台に挑み続けることをここにお約束します。

報告書作成者連絡先（質問等ありましたらご連絡ください）

氏名 村山雅俊

勤務先 長野県阿南高等学校 住所 〒399-1501 長野県下伊那郡阿南町北条 2237

電話 0260-22-2052 FAX0260-31-1013

野球部川田グラウンド 電話 0260-22-3045

報告書作成者連絡先 携帯 090-9806-5513